

2016年2月15日発行

日本国際文化学会事務局

753-8502

山口県山口市桜島3-2-1

山口県立大学

国際文化学部事務室内

Tel/Fax:083-928-3423

email:jsics@yamaguchi-pu.ac.jp

THE JAPAN SOCIETY FOR INTERCULTURAL STUDIES

日本国際文化学会ニューズレター32号

<http://www/jsics.org/>

文化交流創成コーディネーターの創造性

日本国際文化学会会長 小林 文生

ちょうど1年前のニューズレター29号で、白石 さや前会長が「名詞の時代から、動詞の時代」への移行を指摘して、「本学会はその潮流の只中であって、歩きながら考え、考えながら歩いている」と述べておられます。まさしくそのような歩みの中で、本学会が2014年度に制定した「文化交流創成コーディネーター資格認定制度」がいよいよ始動して、まる1年になろうとしています。

第1回文化交流創成コーディネーター2014/2015教育プログラム参加大学認定委員会（馬場 孝委員長）が2015年2月に開催され、8大学9部局からの申請が認可されました。他方、第1回文化交流創成コーディネーター2014資格審査委員会（岡 眞理子委員長）が2015年5月に開催され、2014年度資格認定申請者5名について厳正な審査の結果、5名全員合格となりました。このうち1名を最優秀者として、7月5日開催の第14回全国大会（多摩大学）において表彰するとともに活動内容を発表してもらいました。これにより、文化交流創成コーディネーターのより具体的なイメージが会員のあいだで共有されたのではないのでしょうか。

さらに、2015年度文化交流創成コーディネーター資格短期集中セミナーが2015年9月7日から9月12日の6日間にわたって龍谷大学において開催され、松居 竜五運営事務局長による献身的なすばらしい企画運営のもと、7大学から参加した17名の学部生、院生がグループに別れて熱いドラマを展開しました。最終日には、各グループの成果発表が感動を呼びました。再度、白石前会長の言葉ですが、「自分が『誰であるのか』よりもむしろ『何をするのか』によって自分を理解し創造するとともに、文化や社会をも創造する、そういう時代潮流」に今われわれが直面しているとすれば、このセミナーの参加者たちはみなその中であって、他者に働きかけつつ自分を見つめ直すという反復と試行錯誤を通して、自分が「何をするのか」を認識する格好の場を得たのではないかと思われまます。

このような1年間の活動を振り返ってみて、文化交流創成コーディネーターという本学会が生み出した概念について、少し思うところがあります。それは「私」というものをめぐる思索です。英語でいうsubjectという概念が、対象・世界をどう捉えるかという認識論的な意味では「主観」と日本語に訳され、一方、対象・世界にどう働きかけるのかという実践的行動という観点からは「主体」と訳される、ということをも木村 敏氏が指摘しています。この意味では、文化交流創成コーディネーターには、主体としての自覚的、積極的な態度が求められるのであり、またこの資格取得をめざす過程でそのような「私」の主体としてのあり方が涵養されていくとも言えそうです。また、短期集中セミナーにおいて、初めて出会う他者ととともにグループ行動をつうじて企画を共有し遂行する際に、参加者どうしの主体の相互作用をつうじて、主体としての「私」が何かを創り出す（創成する）過程とともに、その場（複数の主体のあいだとフィールド）に何かが生じる（創成する）。つまり、「創成」という語が持つ他動詞としての意味と同時に、自動詞としての意味が発揮されるということです。この自動詞性が表す創造的・詩的な美、これは、「何の役に立つのか」という実利的な問いをくつがえして、何かをした結果の持つ真の意味を示しうる揺るぎのない根拠なのであり、そのような創造性を伴う活動を促すことは、本学会が担う教育的使命のひとつなのではないかと思うのです。

最後に、本学会が以上のような創造的な運営を遂行するには、若い会員のみなさんの力がたいへん貴重なものとなります。より多くの若い会員のみなさんが存分に力を発揮できる場を今後増やしていくことが重要であると思っています。

2016年度第15回全国大会（早稲田大学）

大会テーマ「紛争と融和における文化の役割 — 国際関係史から学ぶ」

自由論題を募集しています。ご応募お待ちしております。

- ・自由論題は原則として個人研究発表ですが、内容により複数の発表者による発表も可とします。
- ・いずれも発表時間は質疑応答も含めて30分とします。質疑応答の時間が十分とれるよう、発表時間の目安を20分程度としてください。
- ・応募は日本国際文化学会の会員に限ります。ただし、現在学会会員でない方は、申し込みと同時に会員登録を行うことにより資格を得るものとします。
- ・応募は、氏名・現職（大学教職員・有識者・企業や団体・研究所等の場合は所属と肩書き、大学院生・学生の場合は在籍課程などを明記）・連絡先・自由論題発表題目・キーワード（3～5語）を冒頭に記し、発表要旨（40字×25行以内）をつけて、**2016年3月末日（必着）**までにご提出ください。
- ・**提出先：大会事務局（Email）：2016JSICS@list.waseda.jp**
- ・応募いただいた場合、1週間以内を目途に受取確認メールをお送りします。受取確認メールが届かない場合は、お手数ですがご一報お願いいたします。
- ・応募いただいた自由論題については、2014年4月初旬に開催する常任理事会で審議し、結果についてご連絡いたします。
- ・大会の詳細は4月中旬に発表します。多数のご参加をお待ちしております。

第15回全国大会プログラム日程・共通論題等が決定しました 詳細は次回ニュースレター、大会チラシ等でお知らせいたします。 多数のご参加をお待ちしています。

- ・日 時：2016年7月16日(土)・17日(日)
- ・場 所：早稲田大学早稲田キャンパス（国際会議場ほか）
〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1
- ・大会テーマ：「紛争と融和における文化の役割－国際関係史から学ぶ」
- ・日 程：2016年7月16日(土)：常任理事・理事会（昼食時）
2016年7月16日(土)：シンポジウム、共通論題、自由論題、情報交換会等
2016年7月17日(日)：フォーラム、総会、共通論題、自由論題等
- 大会日程 *自由論題の採択数等によりスケジュールが若干変更されることがあります。

7/16(土)

8:00～	受付
9:00-11:00	自由論題 I
11:10-13:10	共通論題 I
13:15-14:30	昼食、常任理事会・理事会
15:00-17:30	シンポジウム「紛争と融和における文化の役割－江戸初期、冷戦期、現代」 基調講演・パネルディスカッション
18:00-19:30	情報交換会

7/17(日)

8:30～	受付
9:00-11:00	自由論題 II
11:10-12:50	昼食、総会、第6回平野健一郎賞表彰式、文化交流創成コーディネーター資格認定優秀者の発表
13:00-15:00	共通論題 II
15:10-17:10	共通論題 III

●大会事務局

大会実行委員長：都丸 潤子（早稲田大学政治経済学術院）
連絡先：〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1
早稲田大学政治経済学術院 都丸潤子研究室気付
e-mail：2016JSICS@list.waseda.jp

●大会参加費

一般会員 2,000円（当日2,500円） 一般非会員 3,000円（当日3,500円）
院生・学生 1,000円（当日1,500円）

情報交換会：一般 5,000円 院生・学生 2,500円

お弁当（お茶つき）：【7月16日】1,000円 【7月17日】1,000円

*学生食堂や会場周辺の食堂はありますが、土曜日は学生で混雑し、日曜日は閉まりますので、お弁当のご予約をお勧めします。ご予約は4月以降の大会参加登録時にお願いいたします。

●大会参加申し込みと振込先

大会参加申し込み用紙、大会参加費振込用の振込用紙は、4月以降発行の次回ニューズレターに同封し、宛先・振込先もご案内いたします。ご案内は学会メーリングリストでもお知らせいたします。

大会参加申込用紙は4月以降に学会ホームページにもアップロードされますので、できるだけ電子ファイルをご利用のうえ、メールでお送りいただければ幸いです。

●託児所利用について

大会期間中に限り、事前に大会実行委員会を通じて予約をされた参加者に早稲田大学内の託児所のご利用が可能となります（料金は利用者負担となります）。予約等についての詳細は4月以降に学会ホームページにアップロードいたします。

●宿泊先

ホテルサンルート高田馬場に各自でご予約ください。（〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-27-7、電話03-3232-0101 JR高田馬場駅早稲田口から徒歩1分。大会会場までバスと徒歩で計約15分。）

*ご予約の際に、「日本国際文化学会全国大会での予約（大会実行委員長：早稲田大学・都丸 潤子）」である旨お伝えいただければ、優先的に予約することができます。お早めにご予約をお願いいたします。優先枠はありませんが、近隣にもリーガロイヤルホテル東京、ホテルメッツ目白など他のホテルがあります。

●共通論題が決定しました

（ご応募・採択多数のため、共通論題枠を増設し、「若手先端研究」も設けて別途時間帯を調整中です。次号で確定情報をお知らせいたします。）

7/16（土）＜共通論題Ⅰ枠 11：10-13：10＞

- ・共通論題1：「近代日本の対外認識-20世紀前半の知識人は「国際社会」をどのように観たのか」
（代表者：萩原 稔）
- ・共通論題2：「国際交流と平和構築-戦間期太平洋問題調査会（IPR）と参加日本人」
（代表者：山岡 道男・飯森 明子）
- ・共通論題3：「戦争・民衆・知性の復興」
（代表者：若林 一平）

7/16（土）＜時間帯調整中＞

- ・若手先端研究a「音楽がつくる公共圏をめぐって（仮）」
（代表者：山脇 千賀子）

7/17 (日) <共通論題Ⅱ枠 13:00-15:00>

- ・共通論題4:「ボーダースタディーズからみたカルチュラルな境界」(ラウンドテーブル)
(代表者:岩下 明裕)
- ・共通論題5:「国際関係における通訳翻訳の文化構築性と社会的役割」
(代表者:河原 清志)
- ・共通論題6:「箱根会議(1988-1997)の歴史的・現代的意義-国際交流・国際文化関係史の視点から」
(代表者:芝崎 厚士)

7/17 (日) <共通論題Ⅲ枠 15:10-17:10>

- ・共通論題7:「紛争における正義、国際規範、文化」
(代表者:山崎 眞次)
- ・共通論題8:「伝統を生かす、文化を活かす-実践的取り組みから見る「伝統」と「文化」(仮)」
(代表者:鈴木 裕輔)

7/17 (日) <時間帯調整中>

- ・若手先端研究β「国際文化学を問い直す-ヒトの国際移動、地域研究、国際関係史の視点から」
(代表者:井上 浩子)

第6回平野健一郎賞を募集します

学会の研究奨励賞(過去の受賞者5名)の流れの上に設立された平野健一郎賞です。

この度「第6回平野健一郎賞」の募集を開始しますので、多数のご応募をお待ちしております。

応募規定は学会ホームページをご覧ください。<http://www.jsics.org/hirano.html>

- 応募先:日本国際文化学会事務局宛て
- 応募締切:2016年4月30日(必着)
- 応募書類:応募書類は審査後に返却いたします。
- 応募結果の発表:第15回全国大会総会において発表し、授与式を行います。

文化交流創成コーディネーター(ICC0:インターカルチュラル・コーディネーター)資格認定制度についての成果報告会・説明会を開催しました

2015年11月14日(土) 14:00~17:00、青山学院大学15号館5階第13会議室において、夏の短期集中セミナーの成果報告がなされました。参加学生の佐藤 伸太郎さんからは応募動機やセミナー中の苦労、良かった点など、実際の声を聴くことができ、次年度のセミナーの企画運営に向けて改善点を確認しました。また、第1回の合格者で最優秀者の館野 帆乃花さんにも出席いただき、卒業後の様子、資格認定がどうかされているか、応募時や第14回大会(多摩大学)でのフォーラム報告時を振り返って思うことなどについて話を聞く機会を得ました。

成果報告会・説明会に先立ち、夏のセミナー終了後に参加学生17名から提出された報告書の審査も行われました。資格審査委員会からは、セミナーで得た経験の意味について報告書を書くプロセスの中で内省が行われ、この段階が重要であるという説明も行われました。

最後に、資格認定のプロセスが全国で国際文化学や関連分野を学ぶ学生たちへのエールになっているかについて議論を行いました。新たな参加大学に向けて申請の手続き、2016年1月末の申請締め切り、2月中旬の参加認定委員会開催について確認し、参加を検討中の大学への呼びかけとしました。
(岩野 雅子)

研究会の報告

2016年1月16日(土) 9:30-18:00、東京恵比寿にある日仏会館1階ホールにおいて、国際研究フォーラム『フランスの文化外交：文化の威光から影響力外交へ』が開催された。2000年代後半～2010年代前半、欧州を襲った政治・経済・社会をめぐるグローバル化の波を受けて、フランスの対外文化政策はその哲学と実践を根底から変化させてきた。このフォーラムではフランスからも多くの研究者・実務者を招聘して、この変動に関する多角的な分析・考察が行われている。当日のプログラム概要は、以下の通り。

開会の辞：クリストフ・マルケ（日仏会館フランス事務所所長）

開催趣旨：岡 真理子（青山学院大学教授）

【報告1】 フランソワ・ショーベ（パリ西大学教授）

「フランス文化外交の歴史 — 『威光』 から 『ソフト・パワー』 へ」

討論者 秋野 有紀（獨協大学専任講師）

【報告2】 岡 真理子

「フランスの対外文化政策の改革とアンスティチュ・フランセの試行2011-2013」

討論者 フランソワ・ショーベ

【報告3】 フィリップ・ラーヌ（在ヨルダンフランス大使館文化参事官）

「フランス流のソフト・パワーはありか？ 現下の政策刷新と世界におけるフランス文化ネットワーク」

討論者 渡辺 愛子（早稲田大学教授）

【報告4】 藤井 慎太郎（早稲田大学教授）

「日本におけるフランス文化外交の改革と変化について
— アンスティチュ・フランセ日本の芸術部門の活動を例に」

討論者 シャルランリ・ブロー（在京都フランス総領事／アンスティチュ・フランセ関西館長）

【報告5】 ロラン・マルタン（パリ第3大学教授）

「文化多様性と多言語主義—現代の対外文化活動が孕む課題」

討論者 川村 陶子（成蹊大学教授）

【報告6】 渡邊 啓貴（東京外国語大学教授）

「文化外交・パブリック・ディプロマシー — 日仏の政策を中心にして」

討論者 フィリップ・ラーヌ

総括：クレール・テュオーデ

（在日フランス大使館文化参事官／アンスティチュ・フランセ日本代表）

主催：青山学院大学総合文化政策学部 日仏会館フランス事務所

共催：日本国際文化学会

後援：在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本

助成：科学研究費事業基盤研究（C）26503010

開会にあたっては、江戸時代の美術史を専門とするクリストフ・マルケ氏から日仏会館の歴史が紹介され、創設時のポール・クローデル以来、知識人の拠点となってきた会場の来歴が確認された。続く開催趣旨の説明では、本フォーラムを企画した岡 眞理子会員より、従来までの「フランス文化の威光」を一新して「影響力外交」の展開を目指したアンスティチュ・フランセの意義が示された。文化外交の新たな有効性と効率性を追求するこの実験では、在外公館文化部および各国のフランス学院の協力体制や一体化がもたらされたが、それはまた外務省、実施機関、文化省の複雑な関係の産物でもある。フォーラムでは、この取組みがアングロ・サクソン系のソフト・パワー論やパブリック・ディプロマシー概念のフランスにおける適用としても検証され、学術研究者のみならず対外文化政策の立案者や実務者にとっても、大きな示唆をもたらす議論が展開されることになった。

まず第一報告では、フランソワ・ショーベ氏よりフランスの文化外交の歴史的变化が明らかにされている。氏によると、かつて国際的プレゼンス、世界へのはたらかけ、フランス語と文学の流布などを使命としていたフランスの文化外交は、1979年のジャック・リゴーによる報告書を契機として変質を始め、1980年代以降は従来の長期的かつ普遍主義的な「威光 rayonnement」の投射から、短期的で政策的な影響力としての「ソフト・パワー」の追求へと変化してきた。これに対しドイツの文化政策を専門とする秋野 有紀氏からは、ナチスの負の記憶ゆえに対外的な文化政策には慎重にならざるを得なかった戦後ドイツと、一貫して文化外交を通じて自己主張を発信してきたフランスとの歴史的条件の差異が指摘されている。

続く第二報告では、岡 眞理子会員からアンスティチュ・フランセ設立にいたる歴史的背景、その法制度ならびに組織構成の特徴、さらには2011年－2013年の試行期間の評価をめぐる詳細な分析が提示された。報告によると、2009年にクシュネール外務大臣のイニシアティブで始動した一連の取組みは、民間の活力も利用する「ソフト・パワー」よりも国家主導による「パブリック・ディプロマシー」に近く、フランス文化のブランド化にも一定程度成功している。討論者のフランソワ・ショーベ氏からは、この実験の背後に2000年代のネオリベラリズムの潮流があり、この時期、フランス国家の官僚制、特に外務省の縦割り行政の克服という課題があったことが触れられた。

第三報告では、ヨルダンから来日したフィリップ・ラーヌ氏により、五大陸すべてに広がるフランコフォニーのネットワークは、文化や思想、学術知識の刷新はもちろん開かれた外交アプローチにも有効であると主張されている。アンスティチュ・フランセを通じた文化的なネットワークは、同時にそのプロフェッショナル化も推進しており、ときに「ミルフィーユ」と形容されてきた文化政策の重複の克服のためにも重要であった。これに対して、イギリスの文化史・文化政策の研究者である渡辺 愛子会員は、本国政府とは一定の緊張関係を維持しているブリティッシュカウンシルと対照することで、フランス文化外交の特徴を際立たせた。

さらに午後の第四報告では、舞台芸術とその環境に詳しい藤井 慎太郎氏より、アンスティチュ・フランセ日本の組織形態や活動実態が詳述された。現在、日本では東京・横浜・関西（京都・大阪）・九州（福岡）の四つの支部を通じてフランス文化ネットワークが構築され、ときに重複もはらみながら絵画コレクションやバレエ、クラシック音楽などの芸術企画が展開されている。在京都フランス総領事でもあるシャルランリ・ブローソー氏からは、近年、各機関は語学講座の提供を通じた自己資金の獲得に努めており、引き続きフランス語学習の活性化を促すとともに、芸術をめぐる日本側のイニシアティブへのサポートも進めていきたいとの希望が表明された。

他方、第五の報告者ロラン・マルタン氏によると、近年フランスはテレビやラジオといった世界的なメディア展開を通じて多言語発信を強化しており、同時にルーヴル・アブダビに象徴されるような新たな国際的文化プロジェクトも模索している。つまり今日では、フランスの言語擁護は自国文化の保護や普及を越えて、より幅広い多文化主義と重なり合うというのである。これに対し、文化の混交

や相互作用に注目してきた川村 陶子会員は、これらの政策でナショナルな文化の一体性が前提になっていることに疑義を呈し、フランスの文化外交が多様性というロジックを利用している可能性も鋭く指摘した。

そして最後の第六報告では、渡邊 啓貴氏が国際関係論の立場から日仏の文化外交の可能性を考察した。氏によると、文化外交はかつての帝国による植民地統合政策から「偉大な中級国家」の影響力外交へと変貌している。そこでは、自国の政策への同意や支持を促す一般教育広報が必要であり、プラスのブランドイメージの構築に加え、外交上のコンテクストそれ自体を創り出すパブリック・ディプロマシーが重要であった。近年、日本がオールジャパンの発信拠点として海外に設置しようとしている「ジャパン・ハウス」はまさにそうした取組みの一つである。討論者フィリップ・ラヌス氏への回答にも示されたように、それはまたビジネスや民間の力を借りた新たな外交の試みでもある。

フォーラムの閉会にあたっては、アンスティチュ・フランセ日本代表で大使館文化参事官でもあるクレール・テュオーデ氏より、各報告一つ一つに丁寧に言及しつつ、フランスと日本の今後の文化交流も展望する力強い総括が行われた。また会場からは、学生・研究者だけではなく一般の参加者も含む50名余りの聴衆が耳を傾け、討論の合間に様々な質問・意見も投げかけられている。いわゆる文化外交の分析は必ずしも容易ではないが、アンスティチュ・フランセの「実験」を焦点とした今回の研究フォーラムは、その過去・現在・未来を多角的に検証・考察することに十分成功したといえよう。さらに報告者と討論者の応答から読み取れるように、そこでは各国の対外文化政策をめぐる比較研究や影響関係の分析はもちろん、その政策評価の可能性も浮かび上がってきた。この意味で文化外交というテーマは、今後ますます国際文化学の重要な研究領域として発展していくことが期待できる。今回培われた研究者／実務者のネットワークを埋もれさせることなく、さらなる共同研究が進展するよう期待したい。

(高橋 良輔)

研究会追加募集のお知らせ

以下の要領で追加募集をいたします。ぜひ研究会活動の企画運営にご活用ください。

- ・申請金額：5万円まで
- ・申請締め切り：随時（2016年3月末日まで）
- ・様式：学会ホームページよりダウンロードし、学会事務局宛に提出（メール添付あるいは郵送で）。
- ・研究会の実施期間：2016年7月16日(土)開催の全国大会前日まで。
- ・研究会実施については以下の3点を条件とします。
 - －共催として「日本国際文化学会」を明記する。
 - －学会メンバーの研究・交流・発信活動を支援するものとし、非学会員の講演等が主となるような場合は、そこに学会メンバーも参加をするプログラム（報告、対話、ラウンドテーブル方式による議論等、様式は自由）を用意する。
 - －開催前に国際文化学会ニューズレターおよびホームページの研究会開催コーナーにおいて周知することを了承いただき、また、開催後1か月以内に400～800字程度の報告書を提出し、これを学会ニューズレターおよびホームページで報告することとする。

理事選挙について

2016年4月から5月にかけて、次期の学会理事選挙を行います。学会運営のため、理事選挙にご協力をお願いいたします。

学会の年会費の振込をお願いいたします

2015年度会費納入をお願いいたします。

一般会員：10,000円、大学院生：5000円、学部生：2000円

郵便局の振込用紙をご利用の上、振込金額をお書きの上、下記振込先までお願いいたします。

ご所属、連絡先のご記入をお願いいたします。

振込先：01390-1-89396 日本国際文化学会

*平成25年度総会により、年会費（10,000円）の支払いに困難を覚える者は、その状況説明を付けて常任理事会宛に会費の減額（5,000円）を申請できるとしました。平成25年分から適応されます。希望者は、常任理事会宛てに理由書を提出ください（書式自由、学会事務局まで郵送）。

次回常任理事会開催のお知らせ

2016年4月16日(日) 13時から早稲田キャンパス 8号館501会議室において常任理事会を開催します。

会場へのアクセス <http://www.waseda.jp/jp/campus/waseda.html>

編集後記

本号が出る時には時期はずれですが、あけましておめでとうございます。本年も国際文化学会をよろしくをお願いいたします。

さて、今号には、7月開催の第15回大会に関する日程・論題等が掲載されました。今回は共通論題の申し込みが殺到し、大会事務局では論題の配置に苦心したという話も伺っております。これは、国際文化学会への関心の高まりを示すものであり、大変よいことであると考えております。引き続き、自由論題への参加を受け付けておりますので、ふるって御参加くださいますようお願い申し上げます。

また、本学会が創設した「文化交流創成コーディネーター」の育成も本格的に始動いたしました。

加盟大学も少しずつ増え、また、育成のためのセミナーも参加者には好評であるとの話も伝わっています。この資格を持った卒業生が社会で活躍することで、少しでも国際文化学会の認知度が高まることが期待されます。着実にこれからも前進していくために、会員の皆様からの御協力をお願いいたします。

(事務局・井竿 富雄)